

## 平成 30 年度人文科学研究所総合研究（長野県）記録にかえて —松本を中心に—

飯沼 健子

平成 30 年度人文科学研究所総合研究では、2 月 26・27 日の二日間で長野県の諏訪・松本・松代・小布施を訪れ調査を行った。調査地のうち諏訪・松代・小布施については所員が詳しく論文で取り上げている<sup>1</sup>。そこで本記録は、松本の視察内容について多少の補足と（筆者は松本地域が地元ということもあり）私見を交えながら記すものである。

### 1. 旧開智学校とその周辺

2 月 26 日（火）の昼過ぎに諏訪調査を終え、中央高速道で松本に向けて出発する。眼下に諏訪湖を一瞬眺め、岡谷を過ぎて山地に入り、最後に長い塩嶺峠のトンネルを抜けると塩尻に出る。間もなく視界が開け、塩尻・松本平・安曇平と一続きの平野となる。諏訪は長野県の中央に位置するが、伊那・飯田と共に「南信」と呼ばれ、塩尻・松本平・安曇平は「中信」と呼ばれる地域である。

松本市内のホテルでチェックインを済ませ、最初に向かったのは旧開智学校である。白い木造校舎の入り口に向かって歩を進めると、その隣には青く塗られた木造の旧司祭館があり、この二棟の歴史建造物の間のつきあたりには市立図書館がある。人の往来もまばらで、静かな学びの雰囲気が醸し出される一角だ。松本市は三つの「ガク都」（「学都」「岳都」「楽都」）<sup>2</sup> をうたっているが、「学都」たる第一の所以は旧開智学校があったことである。

旧開智学校に向かう前に、旧司祭館の案内板を読むと、1889 年（明治 22 年）松本カトリック教会のクレマン神父により、旧藩政時の武家屋敷跡地に建設されたアーリーアメリカン（コロニアル）風の西洋館で、各部屋には暖炉、1・2 階にベランダ、外壁に下見板張りなどがある、と記されている。ここでは日本で最初の本格的な日仏辞典『和仏大辞典』が編まれた<sup>3</sup> という

<sup>1</sup> 諏訪についての詳細は専修大学人文科学研究所『人文科学研究所月報』299 号（2019 年 3 月）の小西・樋口・飯田論文を参照されたい。また、松代については、同号の恒木論文および本号の田中論文を、小布施については、本号の根岸論文を参照されたい。

<sup>2</sup> 「岳都」は北アルプスの山岳観光、「楽都」はスズキ・メソッドやサイトウ・キネン・フェスティバル（2015 年セイジ・オザワ松本フェスティバルに改称）に代表される音楽活動から来ている（松本市「松本の魅力」<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/smph/miryoku/index.html>、2019 年 6 月 10 日閲覧）。

<sup>3</sup> この司祭館で、セスラン神父が 1901 年（明治 34 年）から辞典を編纂し始めた（松本市「旧松本カトリック教会司祭館」<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/smph/miryoku/bunkazai/takara/ken/kenzoubutu/catholic.html>、2019 年 6 月 10 日閲覧）。



旧司祭館 (2019年2月26日筆者撮影)

から、こちらも学都につながる場所だ。

お目当ての旧開智学校校舎に向かう。敷地入口の説明書きには、同校は1873年(明治6年)に創立され、1876年(明治9年)松本の中心部を流れる女鳥羽川沿いに擬洋風校舎を新築したこと、当初は二階建ての教室棟を逆L字型に配し、延面積2,653㎡、児童収容数1,300人の規模だったことなどが記されている。また、構造は「木造二階建、寄棟造、棧瓦葺(さんがわらぶき)<sup>4</sup>、中央部八角塔屋付」で、更に「建築費約1万1千円の約7割を松本全住民の寄付によって建築」した、とある。1961年(昭和36年)には国の重要文化財に指定され、1963年(昭和



旧開智学校 (2019年2月26日筆者撮影)

<sup>4</sup> 棧瓦は、江戸時代の発明で、以降一般的になった普通の方形・波状の瓦(『広辞苑』)。

38 年) にこの開智小学校と田町小学校が合併し、新開智小学校が開校となった。旧開智学校校舎は、1964 年(昭和 39 年) 現在地へ移築され、翌年その隣に新開智小学校の新校舎が完成した。旧開智学校のことを「旧」付けで呼ぶのは、現在も続く開智小学校と区別するためのようだ。

校舎内は資料館になっており、校舎の建築資料や、江戸・明治・大正・昭和の教育資料が展示されている。所蔵資料は約 10 万点というから重要な歴史アーカイブだ。

歴史資料ではないが、同校舎の建築上の特徴を示した写真説明パネルがあり、和風と洋風の要素を分けて示している。和風の要素は瓦屋根、唐破風、瑞雲、龍の彫刻で、洋風の要素は搭屋とそのガラス、天使の彫刻、バルコニー、軒(コーニス)、縦長の窓であるとしている<sup>5</sup>。八角の搭屋は開智学校に続いて建設された他の学校校舎でも採用された<sup>6</sup>。天使の表情はお世辞にもかわいいとは言えないが、当時西洋についての情報が限られている中思い切って設置した時代背景を思わせる。コーニス(cornice)は柱や壁の上部についた段の様な装飾で、これがあるなどことなく重厚感が増すように感じられる。

歴史的な写真資料では、1884 年(明治 17 年) にニューオーリンズ万博に出品された開智学校の写真や、1896 年(明治 29 年) の女鳥羽川氾濫による被害の写真が、この校舎の栄光から災難までを物語っている。こうした経緯を辿りながら、長い年月を経て落ち着いた艶が出た木造の校舎内で教室や廊下を歩き、階段の手すりに触れられることは感慨深い。

2 階の講堂は校舎内で最も豪華な空間である。入口の扉は見事な龍の透かし彫り、講堂の天井からは燭台風の照明、その天井周りにも彫刻、窓の一部にステンドグラス、と趣向を凝らしている。移築前は音楽室として使われていたというから、さぞ美しい音楽の時間であったことだろう。

このような校舎が誕生した理由として、展示資料は三つの理由を挙げている。第一に、城下町の中心部が学区であり、松本藩の経済を支えた商人・職人ら経済力のある住民が多かったため、校舎が大規模かつデザインの凝った建物となったこと、第二に、松本の人々は新しい時代と文明開化への熱意が大きかったこと、第三に、大工棟梁の立石清重は擬洋風建築を独学で学んだが、デザイン性と機能を両立させる技術力を持っていたこと、という理由である<sup>7</sup>。

さて、教育資料の一つに、1901 年(明治 34 年) の興味深い写真がある。校庭で輪になって

---

<sup>5</sup> 旧開智学校展示資料。

<sup>6</sup> 旧開智学校校舎の建設に携わった佐々木喜重(きじゅう)は、1885 年(明治 18 年) に松本の里山辺で山辺学校建設の棟梁を務め、その校舎も八角の搭屋が特徴的である(松本市「旧山辺学校校舎」<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/smph/miryoku/bunkazai/takara/ken/kenzoubutu/yamabe.html>、2019 年 6 月 10 日閲覧)。

<sup>7</sup> 旧開智学校展示資料。

手をつないでいる幼い子供たちの背には更に幼い赤ん坊が背負われている。説明文によると、これは「子守教育」と言い、「家庭が貧しく幼い頃より子守奉公に出ているため学校に通えない子供を対象にした教育」とのことで、長野県内では、1883年（明治16年）上高井郡延徳学校で始まって以来各地で行われ、松本の旧開智学校では1898年（明治31年）の試験的实施を経て、1899年（明治32年）に開智学校男子部に子守教育所として正式に開設し、放課後に授業が行われたという。しかし、そもそも子守の生徒には女子が多いため女子部に移転し、更に翌年には背負われる幼児の扱いに慣れた保母がいて設備も揃った幼稚園が適当と、松本幼稚園に移転したという<sup>8</sup>。封建時代に固定化された身分格差や所得格差を乗り越えて教育機会を与える動きの先進例であったと同時に、子守教育所が転々と開設場所を変えたことに、試行錯誤の様子がうかがわれる。

この他にも、不就学・退学・貧困などで学習が困難な児童向けの「特別学級」、身体的・環境的理由で学校に通うことが困難な児童向けの「特殊学級」<sup>9</sup>が開設された。「特殊学級」は「児童間の侮蔑を誘発するなどの問題が生じ」<sup>10</sup>廃止されてしまい、一筋縄ではいかなかった。教育機会を上げようとする試みは、実践面で差別や偏見の壁に突き当たってしまったことに、常に現場の状況を考慮しなくてはならない教育のあり方を考えさせられる。

展示資料の中でも幾つもの小パネルを配し詳しい説明があるのは、県歌「信濃の国」についてである。作詞は旧制松本中学（後の松本深志高校）および師範学校の教員であり自由民権運動にも加わった浅井冽（きよし）、作曲は東京音楽学校師範部卒で師範学校教員であった北村季晴（すえはる）だ。

「信濃の国」は6番までありとても長い上に、4番では変調して全く違う曲になるという極めて難易度の高い曲だが、信州人にとって馴染み深い歌だ。学校行事や音楽行事の締めくくりは「信濃の国」を少なくとも2番くらいまで斉唱し、澁刺とした調べにのって元氣よく閉会するのが常である。学校教育と「信濃の国」は切り離せないことから、旧開智学校の展示資料に「信濃の国」が紹介されていることは自然なことだ。

長野県庁によると、「信濃の国」の作詞は1899年（明治32年）、作曲は翌1900年（明治33年）で、元は信濃教育会の依頼によりできた唱歌だった<sup>11</sup>。この頃、日清戦争の影響が教育にも及んでおり、これを心配した同会が戦争から離れた地理歴史の唱歌をつくり、その一つが「信

---

<sup>8</sup> 同上。

<sup>9</sup> 同上。

<sup>10</sup> 同上。

<sup>11</sup> 信濃教育会は、県下の学校の教職員ら教育従事者の団体で、研修・教育はもちろん、長野県の風土にあった教科書・参考書の出版まで、県内の教育の向上に貢献してきた。長野県が教育県として知られる様になったことも同会の活動に負うところが大きい。

濃の国」だったという<sup>12</sup>。長らく歌い継がれてきて、県歌として制定されたのはそのずっと後の（1968年）昭和43年である。日清戦争の戦争色を一切排して、後世にも拠り所となる地域の自然・地理・歴史を歌い込んだことが100年以上歌い継がれる理由であろう<sup>13</sup>。

ちなみに「信濃の国」作詞者の浅井は、旧開智学校の卒業生である木下尚江が旧制松本中学で学んでいる時に教鞭をとっていた。木下は後に地元の普通選挙運動でも活躍し、旧開智学校に隣接する現在の松本市立図書館前には「普通選挙法発祥の碑」という石碑がある。普選運動の先駆けとなった普通選挙期成同盟会が、1897年（明治30年）全国に先駆けて松本で結成されたことを記念するものだ。木下は自由民権運動に詳しい浅井から多大な影響を受けた。こうして重要な人物・史実が連鎖して旧開智学校を取り巻いていた。

さて、一行の旧開智学校訪問から2か月も経たない5月17日、文化庁文化審議会は旧開智学校校舎を国宝に指定するよう答申した。明治以降の学校建築が国宝に指定されるのは初めてで、国宝指定の答申が出た翌日5月18日は県内外からの見学者でにぎわったと地元紙は伝えている<sup>14</sup>。また松本市は国宝指定答申を受けて、校舎周辺の整備に取り組む方針を示した<sup>15</sup>。ある意味でこうした大騒ぎになる前の、静かで落ち着いた旧開智学校を訪問できたことは幸運であった。

国宝指定答申を受けて、旧開智学校について地元紙はもちろん全国紙でも多くの情報が発せられるようになった。例えば、「一市一校制」だった明治から昭和初期には、約8,000人もの児童が在籍し、幼稚園・女学校・盲学校などのほか、図書館・博物館が設けられ、成績に応じた学級編成や体の弱い児童の林間保育もあったこと、現在の市立博物館、県立松本盲学校など、元を辿ると旧開智学校に行きつくという<sup>16</sup>。そういえば校舎内の展示資料でも、広い校庭が学童でびっしり埋まっている古い写真が何枚かあった。生徒数8,000人は余りに規模が大きすぎるが、多くの児童に就学機会を与えようとした証でもある。旧開智学校の元校長で市教育長の赤羽郁夫氏は、旧開智学校は「松本の学びの源流」であり「どんな子にも教育を受けさせたいという熱い思い」に満ちた学校であったと言う<sup>17</sup>。

---

<sup>12</sup> 長野県「県歌「信濃の国」について（歴史、歌詞の意味）」<https://www.pref.nagano.lg.jp/koho/kensei/gaiyo/shoukai/kenka.html>（2019年6月10日閲覧）

<sup>13</sup> 長野県が県歌制定50周年を迎えるにあたり、「信濃の国」についての認知度調査を2015年（平成27年）に実施したところ、「全て歌える」と「1番は歌える」をあわせて約8割が「歌える」と回答し、70歳以上では約9割が「歌える」と答えている（長野県「平成27年度 第2回県政モニターアンケート」2015年、13頁、<https://www.pref.nagano.lg.jp/koho/kensei/gaiyo/shoukai/documents/151214houkokusyo.pdf>、2019年6月10日閲覧）。但し、70歳以上では36.6%が「全部歌える」と回答しているのに対し、30-39歳では2.7%に過ぎず（同上）、世代間の差があった。

<sup>14</sup> 『信濃毎日新聞』2019年5月19日。

<sup>15</sup> 『信濃毎日新聞』2019年6月4日。

<sup>16</sup> 『信濃毎日新聞』2019年5月18日。

<sup>17</sup> 同上。

こうしてマスメディアが旧開智学校の先進性を取り上げることは当然だが、歴史が古い分、各時代の暗い側面も隣り合わせであった。そもそも同校誕生の背景には、「開国後海外列強の国力を目の当たりにした新政府が、軍備拡大と同時に教育の充実に力を入れ」、「1872（明治 5）年公布の学制は全ての国民が教育を受けられることを目指し」、「この学制を受けて全国で学校が次々と建設され、その際、学区内の住民が資金を拠出するのが一般的だった」といった状況があった<sup>18</sup>。1880 年（明治 13 年）には、明治天皇が松本に巡幸しこの校舎に立ち寄っている。その際休憩所として使われた部屋は、「明治天皇御座所」として残っている。多くの児童が学ぶ機会を得たとはいえ、明治政府も明治天皇も、人々の才能を伸ばし自由で自立した人間形成を目指して学校づくりを奨励したわけではなく、明治日本の国力を強化するためのものだったことは忘れてはならない。

更に昭和の戦時期になると、教育はあからさまに国家に利用された。『朝日新聞』地方欄によると、松本市中央図書館の元館長である手塚英男氏は、終戦直前の 1945 年に当時の開智国民学校初等科に入学し、「「忠君愛国」を説く教育勅語の謄本と天皇・皇后の写真（御真影）が安置された奉安殿へのお辞儀、鍛錬行軍や勤労働員、「日本は神の国」と教え込む校長」など、当時の経験を紙芝居にして、「国に従う国民を育てる軍国主義教育が強力に進められた」ことを、今に伝える<sup>19</sup>。『中日新聞』地方欄でも、「戦中の児童が残した戦意高揚のポスターや、国が発表した戦果を「ありがたいことです」とする日記なども展示」していること、「戦時下の負の教育についても後世に引き継がないといけない」という手塚氏の思いを紹介している<sup>20</sup>。

旧開智学校が設立された時代の教育は、民主主義や教育を受ける権利を基本理念としたわけではないものの、多くの児童が教育を受けられるという一種の民主的な状態を生み出した。もう一方で、教育機会の拡大は軍備拡大と背中合わせの国家政策の一環であった。やがて戦時下にはプロパガンダを児童に教え込む軍国主義の普及機関と化していた。近代に生まれた学校教育が国家のあり様に大きく左右された歴史から学ぶべきことは大きい。

## 2. 松本城

旧開智学校から 500m 余りの近距離にある松本城へ移動した。松本城についての要約は、筆者のような素人には到底手に負えない。現存する五重六階の木造天守としては日本最古であり、この城に関する多くの書物や発掘調査報告書が世に出ている。インターネット・サイトでも、

---

<sup>18</sup> 『中日新聞』社説、2019 年 5 月 31 日。

<sup>19</sup> 『朝日新聞』地方欄、2019 年 6 月 29 日。

<sup>20</sup> 『中日新聞』地方欄、2019 年 5 月 18 日。



松本城（2019年2月26日筆者撮影）

松本市が提供する情報以外に、独立した「国宝松本城」なる専用のサイトがあり、城の歴史やお堀の修復事業計画からリアルタイムの映像まで情報が豊富である<sup>21</sup>。ここでは、素人の立場から基礎的な理解を目指して事実を整理することに留めたい。

先ず誰がこの城を造り城主となったのかだが、城の悠久なる威厳とは裏腹に、城主はあつてなく幾度も入れ替わった。1590年に入封した石川家から、小笠原、戸田、松平、堀田、水野、戸田と、1869年の版籍奉還まで6回家系が入れ替わった。松本市によると、1593年（文禄2年）に石川康長が天守の築城を始め、1613年（慶弔8年）康長の改易に伴い、小笠原秀政が入封、その2年後には小笠原父子が大坂夏の陣で戦死し、戸田康長を経て1633年（寛永10年）松平直政が入封し、月見櫓などを造った<sup>22</sup>。

戦国時代末期に造られた大天守・渡櫓（わたりやぐら）・乾小天守（いぬいこてんしゅ）は、戦いを想定したものである。城内の説明文によると、城の周囲の石垣上には、銃弾に耐える厚い塀ややぐらを配し、天守だけでも弓矢を射る矢狭間（やざま）は60カ所、鉄砲狭間（ざま）は55カ所と数多く配されており、天守から内堀・外堀までは鉄砲の射程範囲に入る設計となっている<sup>23</sup>。鎧兜、複数の種類の火縄銃、火縄銃の玉を入れて運ぶ「玉箱」などが展示されており、実際にこの城で戦火は交えことはなかったものの、戦いの時代を彷彿とさせる。天守を上っていくと四階で柱が少なくなり広々としたところに御座所と書いた古めかしい表示がある。こ

<sup>21</sup> 松本城管理事務所「国宝松本城」<https://www.matsumoto-castle.jp/>

<sup>22</sup> 松本市「松本城の歴史」<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/smph/miryoku/siro/rekishi.html>（2019年6月15日閲覧）。

<sup>23</sup> 松本城展示資料。読み仮名も同展示資料に準ずる。

の階の説明文には、有事の際、六階と共に城主の座所にあてられたと考えられる、とある<sup>24</sup>。危機管理体制を幾重にも巡らせて築城されているようだ。

もう一方で、戦いの必要がなくなった寛永年代に造られた月見櫓は、説明書きによると、家康の孫で松本城主であった松平直政が三代将軍家光を迎えるため増築したもので、「舞良戸（まいらど）を外すと、三方吹き抜けになり、回りにめぐらされた朱塗りの回縁や船底型の天井など書院風の造りと相まって、優雅な雰囲気を醸し出し」<sup>25</sup> たりと、趣向を凝らしている。

月見櫓が造られた時代以降は封建領主間の戦いはなくなったものの、農民はしばしば過度の年貢負担をかけられ喘いでいた。その結果、安曇平や木曾から農民一揆が幾度か起こった。最も壮絶で悲劇的な一揆は、1686年（貞享3年）安曇平の中萱村の庄屋であった多田加助が率いたものである。松本藩は近隣の藩に比べ過酷な年貢の取り立てをしており、それに加えて不作が続く、農民の生活は極限状態にあった。これを見かねた加助は負担軽減を要求する訴状をもって行動を起こしたところ、多くの農民が加わって城下に押し寄せた。藩主の水野忠直は参勤交代で不在だったが、家老たちが策略を講じて加助ら首謀者と子弟を捕らえ 28 名を極刑に処した。加助は磔柱の上から城をにらみ、要求を絶叫しながら息絶えたと伝えられる<sup>26</sup>。安曇平と松本平一帯では、現在まで「中萱の加助」として人々の記憶に留められ、最期に松本城を睨みつけた瞬間に天守の屋根が傾いたと言い伝えられている。実際に天守屋根はいつの頃からか傾いていたのだが、それが加助の怒りに満ちた睨みによるという伝説が生まれ今に伝わるのは、後世でも加助への憐情と不当な家老たちへの憤りが共有されてきた証であろう。

近世の旧開智学校と中世の松本城、歴史的には全く関連がなさそうな二つの史跡を続けて巡ったが、旧開智学校が建設された理由の一つが城下町で裕福な住民が多かったとすることは、ある意味で交差する点となる。松本城の富は、結局は日本の内陸部平野としてはかなり広い松本平・安曇平と峠を越え木曾も含む地域からの長年の搾取の蓄積によるものである。城下の住民が藩内の農民を直接搾取したわけではないが、松本藩が農民から厳しく年貢を取り立てたことが、封建領主や家老や武士を取り巻く城下の経済発展を支え、城下の商人や職人たちの蓄財につながった。農民に年貢の取り立てと労役を課して、つまり米と労働の無償提供を強いていたのだから、藩主は当然財をなすことができる。従って松本城は直接的な封建的搾取の象徴であるし、旧開智学校も回り回って封建領主の足元での経済活動で築いた富から派生していることを、国宝になるお祭り騒ぎの中でも一考に値するだろう。建築が美しいからといってその歴

---

<sup>24</sup> 同上。

<sup>25</sup> 同上。

<sup>26</sup> 貞享義民記念館「騒動のあらまし」<https://www.city.azumino.nagano.jp/site/gimin/1977.html>（閲覧 2019 年 6 月 30 日）。



史的立場づけまで全てを美化する必要はない。当時の社会構造のからくりを誠実に解き明かして、はじめて史跡を後世に残す意義があるのではないだろうか。

### 3. 松本市立博物館

松本城の門を出て松本市立博物館に向かう。館内には、松本市の概要、歴史、伝統文化や行事、伝統工芸などの展示がある。松本平・安曇平一帯に分布する道祖神や、割竹を編んで作る伝統工芸のみすず細工についての展示や説明もある。旧開智学校の展示でも触れられていたが、みすず細工は、すず竹を原料として編んだ生活用品で、幕末には生産が行われ、明治はじめに盛んになり、1907年（明治40年）頃には米国やヨーロッパに輸出されたという<sup>27</sup>。みすず細工は農家が農閑期に副業として、行うことが多かったが、民芸運動を起こした柳宗悦は幾たびか松本を訪れ、みすず細工に注目していたとされる<sup>28</sup>。

松本の歴史についての展示では、原始・中世を経て昭和期までを辿って示している。松本にとって最大の激動の時期は、明治維新により新たな行政単位に編成された時期であろう。展示パネルには、歴史に翻弄された松本の変化が記されている。版籍奉還・廃藩置県による松本藩の廃止後、松本県が設立され、松本城二の丸御殿に県庁が置かれたものの、4か月で廃止となった。新たに設立された筑摩県は、現在の長野県中部・南部および岐阜県北部を管轄していた。1876年（明治9年）頃に信濃国を一つにまとめようとする動きが出て、松本と長野が県庁候補地となっていた。ところがその年の6月に二の丸の筑摩県庁舎が火災で焼失し、善光寺町（現在の長野市）に県庁を置くことが決められた<sup>29</sup>。松本の視点から見ると、県名が長野県となったことは、いかんとも受け入れがたいものがある。旧筑摩県の地域では「信州」の呼び名を好んで使うことも理解できよう。

### 4. 松本の街

お城を後に、大名町通りに沿って縄手通りまで南下する。縄手通りの入り口手前には、ぽっかりと空いた空間がある。小さな公園スペースなのだが、ここにはかつて鶴林堂（かくりんどう）書店という地方都市としては大型の老舗書店があった。鶴林堂は1890年（明治23年）の創業で、1929年に瓦屋根から3階建てのビルに建て替え、3階にはギャラリーがあり展覧会の

---

<sup>27</sup> 松本市立博物館展示資料。

<sup>28</sup> 同上。

<sup>29</sup> 同上。

他にドイツ語講座などが開かれ、東隣の四柱神社境内にあった松本市公会堂と共に文化の発祥地となった一画であった<sup>30</sup>。1973 年には 9 階建てのビルに建て替えられ、外を見渡せるエレベーターが、当時としては斬新な設計で話題を呼んだ<sup>31</sup>。筆者も高校時代は放課後に寄り道するとしたら、鶴林堂書店に立ち寄り、それに続く本町通りで文房具店の遠兵（えんひょう）に立ち寄るのが常だった。遠兵は更に古い 1789 年（寛政元年）創業である。ところが鶴林堂は 2007 年に、遠兵も 2009 年に閉店となってしまった。他にも何軒もの地元の書店があったが、殆どが閉店となった。アーケードのある通りとして親しまれた六九商店街は、縄手通りから大名町通りを隔てて反対側にあったが、今やアーケードは取り外され閑散とした通りになった。縄手通りの北東隣りに映画館が何件も集まる界隈があったが、2000 年代に入り次々と閉館になり、2010 年にはついに中心市街地の映画館はなくなった。中には 90 年の歴史を持つ老舗映画館もあった。その街にしかない店や昔ながらの小さな通りが数多くあることが、市街地を歩いて回り探索し発見する楽しさを生むのに、現在では松本駅を出て最初に目に入る看板の多くが他のどの都市にもある様なチェーン店のもので、また中心市街地の通りは自動車向けに広く整然と整備されてしまい、歩道はあるものの、車道を飛ばしていく車を横目に、徒歩で移動する者がどこことなく疎外感を覚える街になってしまった。

もちろん中心市街地の衰退は、松本だけではない、全国の地方都市の大きな問題である。しかし、自動車に頼らないコンパクト・シティによる中心市街地の活性化が 1990 年代から世界的に注目されるようになったけれど、松本市はそれとは反対の方向に向かったようだ。みずほ総研の報告では、中心市街地活性化法関連予算は、多くが道路・施設整備などのハード面に投入されたこと、そしてその典型的な例が松本市で、「今まで中心市街地の近くまで車で来て、その後は歩いて中心市街地を巡っていたが、立派な道路が整備されたため目的地まで直接自動車で乗り付けるようになった。人々は中心市街地を歩かなくなり賑わいも失われた」<sup>32</sup> ことを指摘している。

特に小売店舗に関する度重なる法改正、中でも 2000 年施行の大規模小売店舗立地法により、郊外型の大規模小売店舗の規制緩和が更に進んだことは、中心市街地の商店街にとって決定的な打撃であった。米国の圧力に日本政府が屈して規制緩和のための国内法改正を行う、つまり国際的政治経済関係が国内の地方都市をも変貌させる時代であるのだ。例え一都市レベルでの変革は難しいとは言え、かつて時代を先取りしていた学都から提示できるものはなかったので

<sup>30</sup> 中川治雄『松本平の今昔』郷土出版社、2003 年、81 頁。

<sup>31</sup> 同上。

<sup>32</sup> みずほ総研「新まちづくり 3 法で中心市街地は活性化するのか」『みずほ総研論集』11 号、2006 年、39 頁。<https://www.mizuho-ri.co.jp/publication/research/pdf/argument/mron0604-1.pdf>（閲覧 2019 年 6 月 30 日）



縄手通りの商店を女鳥羽川から望む（2019年2月26日筆者撮影）

あろうか、と昔の面影を失った松本市街地をみて悶々とする。昔の松本を知らない訪問者は、これが松本の街だと受け入れるのだろうか、とりたてて心に残る散策とはならないだろう。

とりあえず、一行は現在もかろうじて残る歩行者向けのルートを辿った。縄手通りは歩行者専用の通りで、両側には個性豊かな店が並ぶ。縄手通りのパンフレットには、以下の経緯が記載されている。

縄手は松本城のお堀と女鳥羽川にはさまれた「縄の様に細く長い土手」だった。1879年（明治12年）創建された四柱神社は、翌年の明治天皇の巡幸に向けて築かれたものだ。明治天皇は旧開智学校にも立ち寄り、四柱神社には松本での行在所（あんざいしょ）つまり巡幸中の仮の御所が併設されていた。1888年（明治21年）松本の大火で四柱神社は消失し、2年後に再建された。この頃から神社の要請により通りに露店が出るようになった。こうして縄手は四柱神社の参道として発展してきた。カエルが縄手のシンボルになったのは最近のことで、1989年にカエル石像が東西両方の入り口に設置された。2002年第1回「かえるまつり」が実施され、このころからカエルの町として親しまれるようになったという<sup>33</sup>。

実は縄手通りも紆余曲折を経て今に残っている。1991年に女鳥羽川整備事業計画の説明会が行われ、一時は店舗立ち退きの話が出た。存続することが決まり、川の改修工事にあわせて店舗も新築することになり、それまでのプレハブから、2001年には城下町の長屋門を模した建物に生まれ変わった<sup>34</sup>。

女鳥羽川を対岸に渡り南へ歩を進めると、白いなまこ壁の蔵が立ち並ぶ中町通りに出る。江

<sup>33</sup> ナワテ通り商業協同組合「なわて通り：カエルの街 Nawate Street Map」2016年6月。

<sup>34</sup> 中川、前掲書、63頁。

戸末期や明治に大火があり、燃えにくい蔵造りが拵がったとされる。但し余りに新しいなまこ壁が多いのは、塗り壁に改修をすれば市から補助が出るということで、真新しい蔵が立ち並ぶことになった。はかり資料館や、民芸運動にゆかりがある松本民芸家具のショールーム、地元の工芸作家たちの作品が並ぶ小さなギャラリー・工芸品店などがある。

更に次の通りまで行き、高砂通りで西に曲がった。高砂通りは人形の街として知られている。それもただの人形ではなく雛人形店や節句人形店が連なる、古くからの人形職人技術の集積地だ。また、この通りの東の端には、松本に城下町が形成される以前から飲用に用いられたとされる源智の井戸がある<sup>35</sup>。本町通りに出て、今も健在の老舗、開運堂に立ち寄る。元々呉服商だったが、1884 年（明治 17 年）菓子業に転じた。開運堂で城下町らしい和菓子を買って求め、ちょうど日も暮れてきて松本の街歩きを終了した。

翌 2 月 27 日（水）朝、松本 IC から高速道路に戻り、中萱の加助が人々に慕われた安曇平を眺めながら、松代や小布施がある県北部、いわゆる「北信」へ向けて出発した。そして明科トンネルに入るまでのほんの数分間、平野の西側から北のほぼ視界の果てまで、冠雪した北アルプスの見事な峰々を一望できた。いずれも 3,000 メートル近い山々で、南から順番に、大滝山、蝶ヶ岳、常念岳、横通岳、東天井岳、大天井岳、燕岳、有明山（いわゆる信濃富士）、餓鬼岳、鉢ノ木岳、蓮華岳、爺ヶ岳、そして白銀の白馬連峰と続く。雪形を見るにはまだ早い、春になると名前の通り、蝶、常念坊という徳利を下げたお坊さん、種まき爺さんなどの雪形が現れる。

峰々が輝く景色から突然トンネルの暗闇に入り、安曇平と「中信」を後にする。いくつかのトンネルが続く区域で、少しするとバスガイドさんがこの辺りの姨捨山の伝説について話し始めた。「信濃の国」にも「月の名に立つ姨捨山」とうたわれ、「田毎の月」で知られる名所でもある。正式名は冠着山と言い、口減らしのために老人を山に捨てるという伝説が残っていることでも有名だ。伝説では棄老の掟を定めた殿様は老人の知恵の豊富さに考え改め、掟を取り下げた。しかし、今の時代にこの伝説を再び聞くと、年寄りも弱者も切り捨てる昨今の政治のあり方そのもので、この殿様のように考え直す様子はない。棄老は現在益々進行中、トンネルの中で背筋が寒くなりながら、今こそ伝説や歴史から学ぶべき時なのではと思いを馳せた。

---

<sup>35</sup> 松本市・松本観光コンベンション協会「松本街歩きマップ」2018 年。